

# 終末期を介護老人福祉施設で暮らす 後期高齢者の気がかり・心配

流石ゆり子<sup>1)</sup> 伊藤 康児<sup>2)</sup>

## 要 旨

終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者の、今後の生活に対する気がかり心配を明らかにする目的で、筆者らが先に行った調査<sup>10)</sup>の自由記述欄に回答のあった152名の記述を分析した結果、以下のことが明らかになった。

高齢者の気がかり・心配は【最期までここ（施設）で暮らしていく覚悟を決めている】【日常生活に対する不満と願望】【家や家族が心配で家に帰りたい】【先のことが不安だが心配しても仕方ない】【人に迷惑をかけずに穏やかに暮らしていきたい】【日々の生活や生き方に対する姿勢・願望】【安気に暮らしている】【集団生活での人間関係は難しい】【その他】の10に分類できた。

以上より、高齢者は現実と向かい合い、施設を“終の住処”とすることに折り合いをつけ覚悟を決めて生活しているものと推察される。このプロセスにおいては、繰り返される日常生活のありようが高齢者の安心感に影響を及ぼしているものと思われる。したがって、看護職には“今”“ここで”安心して生活できる療養環境の保障と人生の意味づけができるような関わりが示唆された。

キーワード：終末期、介護老人福祉施設、後期高齢者、気がかり・心配

## I. はじめに

平成17年（2005）年10月1日現在のわが国の総人口は1億2,776万人で、このうち65歳以上の高齢者人口は過去最高の2560万人となり、高齢化率は20.04%と、はじめて20%を超えた<sup>1)</sup>。戦後生まれのいわゆる“団塊の世代（1947年～1949年生まれ）”が65歳以上となりきる2015年の高齢化率は26.0%で、そのうち75歳以上の後期高齢化率は12.5%となる見通しである<sup>2)</sup>。

高齢者の増加につれて総死亡数も増加し続け、2003年には100万人を超えた<sup>3)</sup>。死亡場所（2001年現在）は、病院78.1%、自宅13.5%で、長年首位にあった自宅が1970年代後半に病院と入れ替わり、それ以後、病院での死亡は群を抜いて高率である。老人ホームでの死亡は、現在の形で統計が取られるようになった1995年には1.5%だったものが2001年には2.0%と、低率ながらも増加傾向にある<sup>4)</sup>。

2000年4月の介護保険法の施行と2006年4月の改定により介護保険サービスが充実し、国民のサービス利用に関する権利意識も徐々に高揚している。ニーズの高まりとサービスの充実につれて高齢者の療養生活の場も多様化し、介護保険施設等に入所する高齢者が増え、施設で死亡するケースも今後漸増するものと推察される。

介護老人福祉施設は、生活の場として位置づけられているが、入所者の大半は後期高齢者である上、平均介護度も平成12年の3.35から平成17年には3.74と重度化が進み<sup>5)</sup>、施設での看取りを希望する入所者や家族も増えている。そのような中、平成18年度介護報酬等の改定において、入所者の重度化に伴う医療ニーズの増大等に対応する観点から介護老人福祉施設に「重度化対応加算」と「看取り介護加算」が創設され<sup>6)</sup>、介護老人福祉施設には高齢者の“終の住処”としての期待が一層高まってきている。

（所 属）

1) 山梨県立大学看護学部

2) 名城大学人間学部

（専攻分野）

老年看護学

人間行動学

したがって、終末期 (end-of-life) のケアまでを含めた高齢者介護のあり方の検討は、わが国の緊急課題である。

一方、介護保険施設に入所している高齢者では、9割が認知症を合併しているとの報告もあり<sup>7)</sup>、加齢や疾病などのため心身の機能低下が進んでいる場合も多く、コミュニケーションや意思の確認は極めて困難である。牛田らの研究では、終末期を過ごす場所の決定権が高齢者本人にある場合はわずか10.8%で、家族や医師等に委ねられている場合が多かった<sup>8)</sup>。

ケアを行うにあたっては本人の意向の尊重が大切であり、したがって、コミュニケーションをとりにくいとはいえ、まず本人の思いや生活満足度を把握することが求められよう。ところが、終末期を施設で暮らす高齢者本人の思いや生活満足度などについて、当事者の立場を明らかにした研究は少なく、藤巻<sup>9)</sup>、流石<sup>10)</sup>の研究が散見されるのみである。

そこで、終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者本人が今後の生活に対して抱く気がかり・心配を明らかにし、施設における終末期 (end-of-life) のケアの質を高める基礎資料を得る必要があると考える。

## II. 研究目的

終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者が、今後の生活に対しどのような気がかり・心配を感じているのかを明らかにする。

## III. 用語の定義

本研究でいう「終末期 (end of life)」とは、疾患と老化が進んで心身が衰弱し、その時代に可能な最善の治療により病状の好転や進行の阻止が期待できなくなり、死がそれほど遠くないと判断される状態にある高齢者の人生の終末 (有終) の時期をいう。がんの終末期に特化せず、このような状態すべてを含む<sup>11)</sup>。

「気がかり・心配」とは、日々の生活において高齢者本人が気にかけていることや心配に思っていることをいう。

## IV. 研究方法

### 1. 分析対象およびデータ収集

本研究は、2005年10月～2006年3月に実施した『終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者のQOLとその関連要因』に関する研究<sup>12)</sup>の調査結果から、調査票の自由記述欄に回答のあった152名の「今後の生活に対する気がかり・心配」に関する記述部分のみを分析対象としたものである。

なお、本研究のベースとなる上記調査の対象は、Y県下の介護老人福祉施設48施設のうち、施設長より研究承諾の得られた26施設に暮らす75歳以上の後期高齢者である。施設で最期を迎えることを本人が意思決定している者あるいは家族が最期を迎えることを意思決定し、本人がそれを了解している者で、かつ日常会話による意思疎通が可能な高齢者192名である。高齢者一人ひとりに質問紙を用いた個別面接調査を実施した。

### 2. 分析方法

データ分析は、ベレルソンによる内容分析の手法<sup>13)</sup>を用いた。個々の調査票の自由記述内容を精読し、「今後の生活に対する気がかり・心配」に関する記述を抽出した。内容が一文一義であるように記述を区切り、1記録単位とした。さらに個々の記録単位を内容の類似性により帰納的に分類・抽象化し、カテゴリ化した。最後に各サブカテゴリ・カテゴリに分類された記録単位の出現頻度・比率を算出した。なお、結果の信頼性を確保するために、自由記載からの記録単位とその解釈およびカテゴリ化では、2名の共同研究者がすべて合意する手続きをとった。次に抽出された記録単位とその解釈を意味内容の類似性に基づき分類した上で、サブカテゴリ、カテゴリ化した。

### 3. 倫理的配慮

対象となる施設の施設長に研究の主旨を文章および口頭で説明し、承諾書に署名を得た。承諾の得られた施設の高齢者個々に調査目的や倫

理的配慮事項（自由意思による協力、同意後であっても中断する権利、無記名性、プライバシーの保護、研究目的に限定した使用、個人・施設が特定できない形での分析と公表、終了時の確実な破棄など）を明記した文書を用いて、文書と口頭で分かりやすく説明し、同意が得られた高齢者を最終的な対象者とした。なお、対象者の大半が要介護の後期高齢者であることや、質問内容の特性を考慮し、調査は十分観察しながら実施した。

## V. 結果

### 1. 分析対象とした記録単位数

調査票の自由記述欄に回答のあった152名の「今後の生活に対する気がり・心配」という主題について1つの主張が記述されている言語データを記録単位とし、文脈単位は自由記述全体とした。自由記述より311記録単位を抽出し、分析対象とした。

### 2. 対象者の属性（表1）

分析対象者152名の性別は、女性128名（84.2%）、男性24名（15.8%）であった。85歳以上の超高齢者が59.9%を占め、平均年

表1 対象者の基本属性

		n = 152	
項目		人数	(%)
性別	女性	128	(84.2)
	男性	24	(15.8)
年齢区分	75～84歳	61	(40.1)
	85歳以上	91	(59.9)
	平均年齢 86.2 ± 6.3歳 範囲 75～100歳		
入所理由	家族介護困難	88	(57.9)
	独居困難	61	(40.1)
	その他	3	(2.0)
入所期間	≤3年	88	(57.9)
	3年<19年	64	(42.1)
	平均入所期間 3.6 ± 3.7年 範囲 1ヶ月～18.5年		
介護度	1	36	(23.7)
	2	47	(30.9)
	3	38	(25.0)
	4	24	(15.8)
	5	7	(4.6)
	平均介護度 2.5 ± 1.2 範囲 1～5		

齢（±SD）は86.2 ± 6.3歳（範囲75～100歳）の高齢集団であった。入所理由では、家族介護困難が57.9%を占め、独居困難がこれに次いでいる。入所期間では、3年0ヶ月までが、57.9%を占めていたが、3年1ヶ月以上も42.1%おり、範囲は18年であった。介護度は、要介護2、要介護3、要介護1の順で多く、平均介護度（±SD）は、2.5 ± 1.2（範囲1～5）であった。

### 3. 今後の生活に対する気がり・心配に関連する記述内容が形成したカテゴリ（表2）

311記録単位を分析した結果、次に示す10個のカテゴリが形成された。

以下、カテゴリは【 】, サブカテゴリは< >, 記録単位を「 」で示す。

#### 1) 【最期までここ（施設）で暮らしていく覚悟を決めている】

このカテゴリは63記録単位（20.3%）から形成され、<これからも施設で生活していくつもり>, <この施設で最期を迎えるつもり>の2種類のサブカテゴリに分類できた。

このうち、前者は42記録単位（13.5%）から形成され、その具体的記述内容は、「施設で生活していくつもり」、「他に選択肢がないので施設で生活していくつもり」、「ここで生活するしかない」等であった。

#### 2) 【日常生活に対する不満と願望】

このカテゴリは34記録単位（10.9%）から形成され、<日常生活に対する不満・心配>, <施設での生活に対する願望>の2種類のサブカテゴリに分類できた。

このうち前者は、20記録単位（6.4%）から形成され、その具体的記述内容は、「施設での生活は我慢するしかない」、「トイレのことが心配」、「スタッフの対応が不満」等であった。後者は、「どこかへ出かけたが」、「前の施設に戻りたい」、「たまには家へ帰りたい」、「入所者と仲良く生活したい」、「お風呂に自由に入りたい」、「部屋を自由に使いたい」であった。

表2 今後の生活に対し気がかりや心配に思っていること

記録単位数311=100%

カテゴリー	サブカテゴリー	記録単位	記録単位数 (%)
最期までここ（施設）で暮らしていく覚悟を決めている 63 (20.3%)	これからも施設で生活していくつもり 42 (13.5%)	施設で生活していくつもり	18 (5.8%)
		他に選択肢がないので施設で生活していくつもり	12 (3.9%)
	この施設で最期を迎えるつもり 21 (6.8%)	この施設で最期を迎えるつもり	21 (6.8%)
日常生活に対する不満と願望 34 (10.9%)	日常生活に対する不満・心配 20 (6.4%)	施設での生活は我慢するしかない	7 (2.3%)
		トイレのことが心配	6 (1.9%)
		スタッフの対応が不満	3 (1.0%)
		薬を変えて欲しい	2 (0.6%)
		食事を良くしてほしい	2 (0.6%)
	施設での生活に対する願望 14 (4.5%)	どこかへ出かけたたい	5 (1.6%)
		前の施設に戻りたい	3 (1.0%)
		たまには家へ帰りたい	2 (0.6%)
		入所者と仲良く生活したい	2 (0.6%)
		お風呂に自由に入りたい	1 (0.3%)
家や家族が心配で帰りたい 34 (10.9%)	家や家族のことが心配 23 (7.4%)	子供のことが心配	12 (3.9%)
		家族のことが心配	4 (1.3%)
		孫のことが心配	3 (1.0%)
		家が心配	3 (1.0%)
	(帰れないけれど) 本当は家に帰りたい 11 (3.5%)	妻のことが心配	1 (0.3%)
		帰れないけれど家に帰りたい	7 (2.3%)
先のことが不安だが、心配しても仕方がない 33 (10.6%)	心配しても先のことは分からない 24 (7.7%)	心配しても仕方がない	20 (6.4%)
		先のことは分からない	4 (1.3%)
	先のことを考えると心配 9 (2.9%)	万が一の時が心配	4 (1.3%)
		身体が動かなくなった時のことを考えると心配	3 (1.0%)
人に迷惑をかけず穏やかに暮らしていきたい 27 (8.7%)	人に迷惑をかけないようにしたい 15 (4.8%)	最期のことは家族に任せてあるが不安で眠れない	2 (0.6%)
		人に迷惑かけたくない	10 (3.2%)
	1日1日を穏やかに生活していきたい 12 (3.9%)	子供に迷惑かけたくない	5 (1.6%)
		1日1日を無事に過ごしたい	7 (2.3%)
		穏やかに生活したい	3 (1.0%)
日々の生活や生き方に対する姿勢・願望 (～したい・～に気をつけている) 27 (8.7%)	普通に生活していきたい	2 (0.6%)	
	病気が治ったら～したい	5 (1.6%)	
	最期まで自分らしく生活したい	4 (1.3%)	
	いつまでも元気でいたい	3 (1.0%)	
	自分のことは自分でする	2 (0.6%)	
	病氣ばかりしたくない	2 (0.6%)	
	転ばないように気をつけている	2 (0.6%)	
	寝たきりになりたくない	2 (0.6%)	
	献体したいと思っている	1 (0.3%)	
	人を陥れず生きたい	1 (0.3%)	
	自分よりレベルの上の人と友人になりたい	1 (0.3%)	
	夫より長生きして見送りたい	1 (0.3%)	
	早く施設の生活に慣れたい	1 (0.3%)	
	毎日お経をあげている	1 (0.3%)	
	人に頼らず生きていきたい	1 (0.3%)	
死に方に対する願望 26 (8.4%)	楽に死にたい	15 (4.8%)	
	もういつ死んでもいい	6 (1.9%)	
	子供に看取ってもらいたい	3 (1.0%)	
	恩返しをして死にたい	2 (0.6%)	
安気に暮らしている 20 (6.4%)	感謝し、安気に暮らしている 14 (4.5%)	施設は安心だ	6 (1.9%)
		感謝して生きている	6 (1.9%)
	今、心配なことはない 6 (1.9%)	気ままに生活している	2 (0.6%)
集団生活での人間関係は難しい 19 (6.1%)	施設での人間関係は難しい 16 (5.1%)	人間関係は難しい	7 (2.3%)
		集団生活は難しい	6 (1.9%)
	ゆっくり話を聴いてくれる人が欲しい 3 (1.0%)	話のできる人がいない	3 (1.0%)
その他 28 (9.0%)	身体の機能が低下し、思うようにならない 16 (5.1%)	ゆっくり話を聴いてくれる人が欲しい	3 (1.0%)
		身体が思うようにならない	10 (3.2%)
	お金の問題 10 (3.2%)	身体の痛みが辛い	6 (1.9%)
		施設の利用料金が上がることが心配	5 (1.6%)
	その他 2 (0.6%)	お金の欲しい	3 (1.0%)
		子供に財産を渡してしまったこと	2 (0.6%)
	仏壇に絶やさず線香をあげてほしい	1 (0.3%)	
	昔とは自分が変わってしまった	1 (0.3%)	

### 3) 【家や家族が心配で帰りたい】

このカテゴリは34記録単位(10.9%)から形成され、〈家や家族のことが心配〉、〈(帰れないけれど)本当は家に帰りたい〉の2種類のサブカテゴリに分類できた。このうち前者は、23記録単位(7.4%)から形成され、その具体的記述内容は、「子供のことが心配」、「家族のことが心配」、「孫のことが心配」「家が心配」等であった。

### 4) 【先のことが不安だが心配しても仕方ない】

このカテゴリは33記録単位(10.6%)から形成され、〈心配しても先のことは分からない〉、〈先のことを考えると心配〉の2種類のサブカテゴリに分類できた。

このうち前者は、24記録単位(7.7%)から形成され、その具体的記述内容は、「心配しても仕方ない」、「先のことは分からない」であった。後者は、「万が一の時が心配」、「身体が動かなくなった時のことを考えると心配」、「最期のことは家族に任せてあるが不安で眠れない」であった。

### 5) 【人に迷惑をかけず穏やかに暮らしていきたい】

このカテゴリは27記録単位(8.7%)から形成され、〈人に迷惑をかけないようにしたい〉、〈1日1日を穏やかに生活していきたい〉の2種類のサブカテゴリに分類できた。このうち前者は、15記録単位(4.8%)から形成され、その具体的記述内容は「人に迷惑をかけたくない」、「子供に迷惑かけたくない」であった。また後者は、「1日1日を無事に過ごしたい」、「穏やかに生活したい」、「普通に生活していきたい」であった。

### 6) 【日々の生活や生き方に対する姿勢・願望】

このカテゴリは27記録単位(8.7%)から形成され、それに関連する記録単位の具体的記述内容は、「病気が治ったら~したい」、「最期まで自分らしくいたい」、「自分のことは自分です」、「病気ばかりしたくない」、「転ばないように気をつけている」、「寝たきりになりたくない」等であった。

### 7) 【死に方に対する願望】

このカテゴリは26記録単位(8.4%)から形成され、それに関連する記録単位の具体的記述内容は「楽に死にたい」、「もういつ死んでもいい」、「子供に看取ってもらいたい」、「恩返しをして死にたい」であった。

### 8) 【安気に暮らしている】

このカテゴリは20記録単位から形成され、〈感謝し、安気に暮らしている〉、〈今、心配なことはない〉の2種類のサブカテゴリに分類できた。このうち前者は、14記録単位(4.5%)から形成され、その具体的記述内容は、「施設は安心だ」、「感謝して生きている」、「気ままに生活している」であった。

### 9) 【集団生活での人間関係は難しい】

このカテゴリは19記録単位から形成され、〈施設での人間関係は難しい〉、〈ゆっくり話を聴いてくれる人が欲しい〉の2種類のサブカテゴリに分類できた。このうち前者は、16記録単位(5.1%)から形成され、その具体的記述内容は、「人間関係は難しい」、「集団生活は難しい」、「話のできる人がいない」であった。

### 10) 【その他】

このカテゴリは28記録単位から形成され、〈身体の機能が低下し思うようにならない〉、〈お金の問題〉、〈その他〉の3種類のサブカテゴリに分類できた。

## VI. 考 察

本研究は、終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者が今後の生活に対して気がかりや心配に感じていることを尋ね、その内容を10のカテゴリに分類できた。これらのカテゴリを基に、ここでは以下の3点より考察する。

### 1. 最期まで施設で暮らすことへの覚悟と折り合い

本研究の対象者である高齢者は、【先のことが不安だが、心配しても仕方ない】、【(帰れないけれど)家や家族が心配で家に帰りたい】という思いをもちながらも、施設で生活すること

に折り合いをつけ、【最期までここ（施設）で暮らしていく覚悟】を決めていた。

また現時点で、既に施設を終の住処とし生活することを受容し、「施設は安心だ」、「感謝し生きている」、「気ままに生活している」、「今、心配なことは何もない」のように【安気に暮らしている】高齢者もいた。

しかし、そこに至るプロセスにおいては、様々な葛藤があったであろうことが推察される。小倉らによる介護老人福祉施設で入居者が自分の生活をつくっていくプロセスの研究でも、当初は施設に馴染めなかった高齢者が、自分なりの工夫や苦勞を重ねながらそこでの人的・物的環境との間に安心して自分らしく生活できる関係をつくり、落ち着いていくことが明らかにされている<sup>14)</sup>。本研究の調査対象とした高齢者は、介護老人福祉施設で最期を迎えることを本人が意思決定している、あるいは家族が意思決定し、本人がそれを了解している者である。そうした高齢者であっても、現在置かれた状況の中、自分の力ではどうにもならない現実と向かい合い、施設を“終の住処”とすることに折り合いをつけ、覚悟を決めて生活しているものと推察される。

本研究で分析を加えたのは、筆者らが先に行った調査の自由記載欄への回答であるため、終末期を施設で暮らす後期高齢者の内面の深い部分までを把握することには限界がある。今後、さらに研究方法を工夫して後期高齢者の心理面の葛藤や気持ちの落ち着きに至る過程を明らかにし、この過程を支えるケアのあり方を提言することが次の課題となる。

## 2. 施設での日々の暮らしに対する不満

施設は集団生活の場であり、そこでは、衣・食・住の日常生活の営みが行われている。わが国の高齢者施設には、多床室での介護が行われてきた長い歴史がある。しかし、1994年ごろからユニットケアに関する議論が始まり、その後の実証研究の成果をふまえ、2002年度からユニットケア型特養に対応した施設整備費補助金が設

けられるなど、やっとユニット化が進められる時代を迎えた<sup>15)</sup>。国は、2006年4月の介護保険制度改革の中で、今後の高齢者介護の基本的な方向性として、平成26年度を目途に特養のユニット型個室（準個室）の割合を70%以上にするという方針を打ち出している<sup>16)</sup>。

こうした経緯から見ても、わが国の高齢者施設における日常生活の質は、今後さらに向上する余地が大きいと判断される。本研究結果でも、「施設での生活は我慢するしかない」、「トイレのことが心配」、「食事をよくして欲しい」等＜日常生活に対する不満・心配＞や、また「どこかへでかけたい」、「お風呂に自由に入りたい」、「どこかへ出かけたい」、「入所者と仲良く暮らしたい」等、＜施設での生活に対する願望＞が聞かれた。このように、自宅で過ごしているときにはごく当たり前の、“私の生活”が施設では保障されず、高齢者が【日常生活に対する不満と願望】を抱きながら生活し、自らが決定する機会の狭小化、個別性の喪失、自尊感情の低下を経験している現実を伺い知ることができる。したがって、高齢者にとって施設は衣・食・住をはじめ日常的世話を保障され、安心感の得られる場であると同時に、生活施設のもつ新たな問題を体験する場でもあるといえる<sup>17)</sup>。

今回の調査対象者は、85歳を超えた超高齢者が60%近くを占めており、また平均介護度も $2.5 \pm 1.2$ の要介護高齢者である。その健康特性を考慮すると、この先何年健康で生活できるかという保障はない。したがって、高齢者は見通しをもてず、“今”“ここで”の生活が安心して、より安全安楽に行えることを重視していると推測される。米国の長期ケア施設で行なわれたQOL（生活の質）に関する意識調査で、「入所者のQOLとは何か」と訊ね回答を求めた結果でも、入所者は第一位に「安心感」、次いで「人間関係」と回答していた<sup>18)</sup>。との報告がある。

日常生活は日々繰り返される営みである。その営みが、施設においても他者に気兼ねなく、自由に、かつ一人ひとりが生きてきた歴史や生活背景を尊重した中で行えることは、高齢者

個々の基本的ニーズを満たし、QOLの向上にもつながる。藤原らは、施設入所に関して主体的な意思決定がされていなくても現在の生活に満足感をもっている状況も観察され、身近なありふれた日常生活上の意思決定に着目することの重要性を指摘している<sup>19)</sup>。本研究対象者は、全員が何らかの形で入所の意思決定を自らしており、藤原らの結果はそのままではまらないが、高齢者の“終の住処”となる施設においては、日々繰り返される、ありふれた日常生活のありようを自分の意思で決定し、自宅と同様に“私の生活”を維持するケアが必要であり、そのための療養環境（人的・物的）の保障が不可欠であると考えられる。

したがって、高齢者の“終の住処”となる施設においては、自宅と同様に安心して生活できる療養環境（人的・物的）の保障が不可欠であると考えられる。

### 3. 施設での暮らし方・生き方・死に方に対する姿勢と願望

介護老人福祉施設は、“終の住処”とも言われ、大半の入所にとっては人生の締めくくりの場所ともなる施設である。本研究対象者も【人に迷惑をかけず穏やかに暮らしていきたい】や「病気が治ったら～したい」、「最期まで自分らしく生活したい」、「いつまでも元気でいたい」、「病気がかりしたくない」、「転ばないように気をつけている」など、前向きな【日々の生活や生き方に対する姿勢・願望】を持ちながら、かつ「楽に死にたい」、「もういつ死んでもいい」、「子供に看取ってもらいたい」など、近い将来必ずや訪れる死を直視し、自分の死に方に対する願望と明確な意思表示をしながら、比較的心穏やかに生活していることが明らかになった。

一般に高齢者は、若い人よりも死を受け入れやすい<sup>20)</sup>と言われるが、人生全体を肯定的に捉えることができる高齢者においては、死を気持ちの上で受け入れることと日々を前向きに生きようとするとは矛盾しない。

間近に迫り来る死への実感があるからこそ、

老年期は人生の最終段階であるだけでなく、それまでの人生を意味づけ直す時期として重要である。上記のように、間近に迫り来る死への実感があるが、老年期という最後の段階で幸せな日々を過ごせた人は、それまでの人生がすべてその幸せのために存在したと意味づけるし、老年期に不幸な日々を過ごすことになった人は、それまでの人生がすべて色あせて見えてくるようである<sup>21)</sup>。したがって、終末期を施設で暮らす高齢者が自らの人生を意味づけられるよう促し、また導くような関わりを示唆された。

### 4. 本研究の限界

本研究では、介護老人福祉施設で最期を迎えることを本人が意思決定している場合と家族が意思決定し本人がそれを了解している場合を区別した調査を行ってはいない。結果を考察した限りでは、この点が影響している可能性もあるため、今後の研究においては、“終の住処”とする意思決定の主体を区別した調査が必要である。今後は、テーマや方法を十分に吟味した面接による聞き取り調査を行っていく必要がある。

## VII. 結 論

筆者らが先に実施した『終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者のQOLとその関連要因』に関する調査の自由記述欄に回答のあった152名の「今後の生活に対し感じている気がかり・心配」に関する記述部分を分析対象とし分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 本研究対象者152名の基本属性は、性別は、女性84.2%、男性15.8%、平均年齢は86.2±6.3歳であった。また平均介護度は2.5±1.4で平均入所期間は、3.6±3.7年であった。
2. 高齢者が感じている気がかり・心配として、【最期までここ（施設）で暮らしていく覚悟を決めている】【日常生活に対する不満と願望】【家や家族が心配で家に帰りたい】【先のことや不安だが心配しても仕方ない】【人に迷惑をかけず穏やかに暮らしていきたい】【日々の生活や生き方に対する姿勢・願望】【死に

方に対する願望】【安気に暮らしている】【集団生活での人間関係は難しい】【その他】の10カテゴリが抽出された。

3. 以上より、高齢者は、現在置かれた状況の中で現実と向かい合い、施設を“終の住処”とすることに折り合いをつけ、覚悟を決めて生活しているものと推察される。また、ここに至るプロセスにおいては、日々繰り返されるありふれた日常生活ではあるが、そのありようが、高齢者の安心感に影響を及ぼしているものと思われる。超高齢者においては、遠い未来でなく、“今”“ここで”の生活を安心して行うことのできる療養環境（人的・物的）の保障が不可欠である。合わせて人生の意味づけができるような関わりを示唆された。

#### 謝辞

本研究実施にあたり、貴重なご意見を提供してくださった介護老人福祉施設利用者の皆様ならびに調査にご協力くださった施設スタッフの皆様にご感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 内閣府：平成18年版高齢社会白書，2，株式会社ぎょうせい，東京，2006.
- 2) 高齢者介護研究会：2015年の高齢者介護—高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて—，80，法研，2003.
- 3) 厚生統計協会：国民衛生の動向・厚生指標臨時増刊号，第53巻第9号376-377，2006.
- 4) 前掲書2)，122，法研，2003.
- 5) 厚生労働省：平成17年度介護サービス施設・事業所調査結果の概要，(2007-01-23閲覧)  
<http://mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/serviceo5/kekka3.html>
- 6) 厚生労働省：速報平成18年度介護報酬等の改定について—概要—，月刊総合ケア，Vol.16 No.3，86-107，2006.
- 7) 篠田道子：高齢社会に求められるケアマネジメントサービス，114，医学書院，2003.
- 8) 牛田貴子，流石ゆり子，亀山直子，他：Y県下の介護保険施設に勤務する看護職が捉えた終末期 (end-of-life) における意思決定の現状，山梨県立大学看護学部紀要，9-15，2006.
- 9) 藤巻尚美，流石ゆり子，牛田貴子，他：介護老人福祉施設を“終の住処”としている後期高齢者の現在の生活に対する思い，老年看護学，Vol.12 No.1，80-86，2007
- 10) 流石ゆり子，伊藤康児：終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者のQOLとその関連要因，老年看護学，Vol.12 No.1，87-93，2007.
- 11) 流石ゆり子，牛田貴子，亀山直子，他：高齢者の終末期のケアの現状と課題—介護保険施設に勤務する看護職への調査から—，老年看護学，Vol.11 No.1，70-85，2006.
- 12) 前掲書10)
- 13) Klaus Krippendorff：An Introduction to Its Methodology，1980，三上俊治，椎野信雄，橋本良明訳，メッセージ分析の技法「内容分析」への招待，頤草書房，東京，2005.
- 14) 小倉啓子：特別養護老人ホーム新入所者の生活の適応の研究—「つながり」の形成プロセス，老年社会科学，24 (1)，61-70，2002.
- 15) 前掲書2)，94-100，法研，2003.
- 16) 厚生労働省：介護保険制度改革の概要—介護保険法改正と介護報酬改定—，(2007.8.20閲覧)  
<http://mhlw.go.jp/topics/0603/dl/data.pdf> #search='介護保険制度'
- 17) 浅野仁，谷口和江：老人ホーム入所者のモラルとその要因分析，社会老年学，No.14，36-48，1981.
- 18) 浅野仁，田中荘司：明日の高齢者ケア5 日本の施設ケア，9-15，中央法規出版，東京，1995.
- 19) 藤原智恵子，松浦由紀子，森田愛子，他：生活の場所に関する高齢者の意思決定（第2報）—生活場所を決定するまでのプロセス—，神戸市看護短期大学部紀要，第22号，63-76，2003.
- 20) 柏木哲夫：老人医療とターミナルケア，からだの科学，通巻第179号，71-74，1994.
- 21) 守屋國光：老年期の心の成長と看護者・家族とのかわり，Gerontology，9，315-319，1997.



**Anxiety and Worry during the End of Life  
among elderly people aged 75 or over Living in  
Welfare Facilities for  
the Elderly Requiring Long-Term Care**

SASUGA Yuriko<sup>1)</sup> ITOH Kohji<sup>2)</sup>

Key words : end of life, long-term care welfare facilities for the elderly, persons aged 75 old or older,  
anxiety and worry